

## 「実習先と構築する“相談援助実習におけるプログラム”の質の向上に関する研究」

蒲生俊宏・岸野靖子・岡崎利治・黒川京子・高田明子  
佐竹要平・竹内幸子・手島陸久・川染智子・添田正揮  
野嶋成美・倉島ひろみ

### I. はじめに

2009 年度から新カリキュラムが新たにスタートし専門職養成としてのソーシャルワーク実習の位置づけが明確になり、実習指導者講習会の研修が義務化される中で、実習先の実習プログラムの内容が大きく変わってきている。しかし一方で、新カリキュラムの実習内容の幅が広く、職員体制の余裕のない所ではなかなか困難であり、現場の指導職員の率直な声としては、負担感が強く混乱している実態が否めない。特に新カリキュラムでは、実習生へのスーパービジョン体制や実習マネジメントの必要性が強調され、養成校と実習先の連携の必要性が指摘されるようになってきているが、未だ相談援助実習プログラムについては、①職場実習、②職種実習、③ソーシャルワーク実習の3段階実習の必要性が強調されるだけで具体的指導方法が明確にされないままである。実習先の厳しい実状の中で、しかも23日間(180時間)という限られた期間の中で、学生が自ら考え行動できる効果的な実習プログラムの構築が喫緊にせまった課題となってきた。

実習プログラムについては、平成20年度老人保健事業推進補助金(老人保健推進等事業分)「介護保険分野における社会福祉士養成実習のモデル構築に関する研究」報告書では、介護保険分野における社会福祉士実習の課題としてケアワーク実習の域を出ていないことや、実習先指導職員の資質向上が課題として提起されてきている。また、社団法人日本社会福祉士会施設実習指導者研修委員会フォローアップ研究作業部会報告書では、養成校教員の資質向上が課題であると指摘されてきている。

新カリキュラムは、海外のソーシャルワーク教育をモデルとして構築されてきているが、日本の現状に即し、学生の実態に合わせた実習指導や、実習施設・機関の強みを活かした実習指導の内容が強く現場から求められてきている。実習指導の枠組みは、実習生・実習先指導職員・利用者・養成校教員の4者関係から成り立つものであり、現状の相談援助実習指導の実態について、当事者である学生の目線から、実習先指導職員と共に実習指導のあり方、特に実習プログラムのあり方を考察し、日本型ソーシャルワーク実習教育の基盤を作っていきたい。

本報告書は、2012年度共同研究「実習先と構築する“相談援助実習におけるプログラム”の質の向上に関する研究」に基づいている。本報告書作成にあたり、共同研究の企画、計画書作成、調査用紙の作成、分析結果の考察については、研究プロジェクトチームで行った。

### II. 研究の概要

本研究では、本校の2009年度～2012年度の4年間にわたり、相談援助実習後の実習生のアンケート調査を行った。また、2010年度～2013年度の3年間にわたり、他大学2校についても同ア

ンケート調査を実施し、学生の実態調査を行った。調査結果を分析することにより、学生数・教員の指導体制・指導内容・実習先の状況などについてそれぞれ違いがあるが、学生が求めるスーパービジョン像・実習指導の内容・学生の課題については、多少の差はあるが基本的に大きく変わらないことが明らかになった。また、4年間の本校の実習生アンケートの分析を継続して行うことにより、本校の学生の特徴が明確になり、教員の指導上の課題がより具体的になった。

さらに、実習先指導職員の2回のグループヒアリング調査によって、実習プログラムとして①地域資源調査や福祉マップ作り、②面接や家庭訪問の体験、③利用者との関係形成やニーズ把握のアセスメント、④個別支援計画の作成、⑤個別支援計画の説明やケースカンファレンス（または地域ケア会議等）のロールプレイング、⑥介護予防教室などのイベント企画、⑦実習ノートの考察の深め方、⑧実習での学びの発表など多様な内容が把握された。しかし、実習指導は学生の個々の状況に応じて違い、学生の個別のニーズを上手に引き出したり、実践への振り返りが重要であるなど、プログラムだけでなく、スーパービジョンとマネジメントが密接に関わっていることも同時に明らかになった。

本報告では、実習生アンケート調査結果と実習先指導職員のグループヒアリング調査結果を分析した結果を報告し、魅力ある実習プログラムの新たな視座を構築していきたい。

### Ⅲ. 実習生アンケート調査結果

本調査の目的は、相談援助実習後の実習生のアンケート調査結果から学生の変容の実態を明らかにし、相談援助におけるプログラムのあり方を考察し、新たな視座を開発することである。

実習生のアンケート調査では、調査対象に協力依頼文書にて相談援助実習指導の質の向上を目的としていること、回答の強制を行っていないこと、プライバシーの遵守、得られたデータは、本研究の目的のみに使用することを誓約し、同意書を作成している。

#### （1）「実習指導を通じての学びと課題」の4年間（2009年度～2012年度）のデータ比較

「実習を通じての学びと課題」の45項目の回答について、重み得点（とても思う＝2、少し思う＝1、あまり思わない＝-1、まったく思わない＝-2）をつけて数値化し、重み合計（重み得点×回答件数総和）の平均点（未回答を除く、重み得点の平均点）にてレーダーチャートを作成し、2009年～2012年度データを比較した。

#### ◆調査期日及び対象

- ・2009年度12月：A大学（本校）実習生 有効回答225名（回収率100%）
- ・2010年度12月：A大学（本校）実習生 有効回答131名（回収率57%）
- ・2011年度12月：A大学（本校）実習生 有効回答165名（回収率84%）
- ・2012年度12月：A大学（本校）実習生 有効回答189名（回収率96%）

2010年度については、授業最終日の各クラスでアンケートを実施した為、非常に回収率が悪かった。2011年度は、実習報告会後大教室にてアンケートを実施したが、全クラスで行うことがで

きずに回収率が今一つだった。2012年度については、アンケート調査について、事前に説明し回収率を高めることができた。

## 1. 教員関係

教員関係では、7項目の平均点は年度ごとに以下の表1の通りである。

表1 教員関係

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		2009年	2010年	2011年	2012年
教員関係	1 実習前の職員の事前学習指導は充分だった	0.68	1.13	0.87	0.99
	2 巡回時の指導職員はよく実習生の話聞いてくれた	1.42	1.82	1.63	1.62
	3 巡回時の指導職員のスーパービジョンは適切だった	1.15	1.49	1.24	1.37
	4 実習先の指導職員と実習内容などの調整をしてくれた	0.76	1.19	0.91	1.00
	5 実習記録の書き方についてよく指導してくれた	0.66	1.06	0.76	0.85
	6 実習後の振り返りや実習報告書の作成について丁寧に指導してくれた	1.08	1.32	0.93	1.05
	7 実習での不安や悩みについてなかなか相談できなかった	-0.73	-0.80	-0.68	-0.58

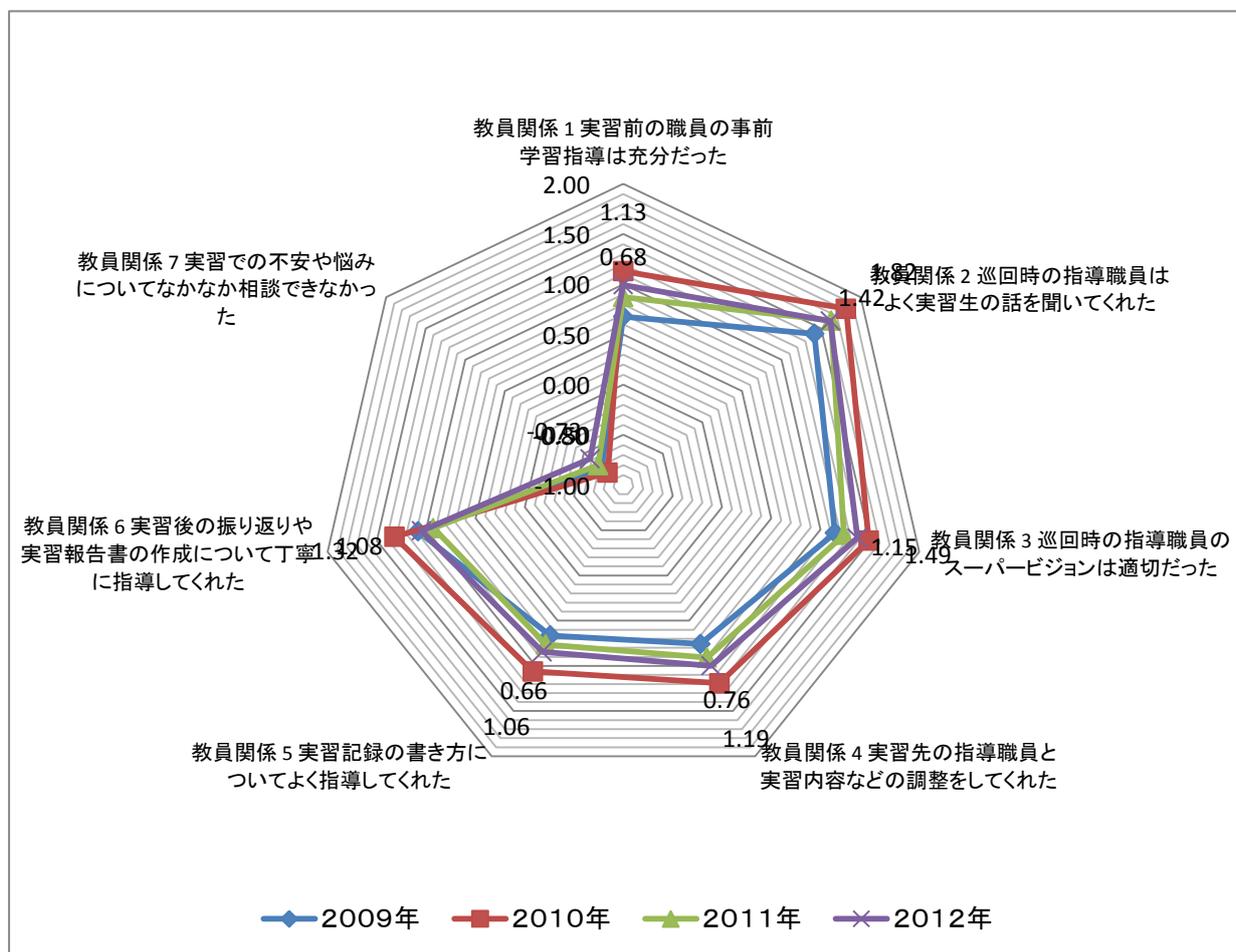


図1 教員関係

2009年度が一番内側で、次に2011年度、2012年度の順で、一番外側が2010年度である。

「1 実習前の職員の事前学習指導は充分だった」、「3 巡回時の指導職員のスーパービジョンは適切だった」、「4 実習先の指導職員と実習内容の調整をしてくれた」、「6 実習後の振り返りや実習報

告書の作成について丁寧な指導してくれた」については、年度ごとに徐々に上回ってきているが、2010年度には及ばない状況である。教員の移動などあり、指導内容の周知と事前学習の指導、実習内容の調整、実習記録の書き方の指導について強化が必要であると考えられた。また、「7実習での不安や悩みについてなかなか相談できなかった」の項目は、やや外側に位置してきている状況あり、学生自身からの不安や悩みの相談が消極的になってきている傾向あり、実習生の気持ちや意向を引き出すサポートの必要性が示唆されている。

## 2. 利用者関係

2009年度～2012年度の4年間の利用者関係についての8項目のデータ比較は、以下の表の通りである。

表2 利用者関係

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		2009年	2010年	2011年	2012年
8	利用者とのコミュニケーションが取れた	1.24	1.14	1.13	1.20
9	利用者との信頼関係が構築できた	0.57	0.41	0.39	0.32
10	利用者とのニーズ把握から個別支援計画作成につなげることができた	-0.37	-0.32	-0.57	-0.16
11	利用者と家族の関係、利用者の家族が抱える課題が理解できた	0.37	0.35	0.48	0.48
12	利用者との関係形成について社会福祉士としての遣り甲斐を実感できた	0.68	0.84	0.74	0.58
13	利用者に積極的に関われなかった	-0.47	-0.38	-0.32	-0.21
14	利用者が抱える生活課題(例えばDV・虐待・死など)について強いストレスを受けた。	-0.57	-0.99	-0.83	-0.59
15	利用者の暴力や暴言などの対応(ボディタッチなども含む)が困難だった	-0.70	-1.12	-0.98	-0.78

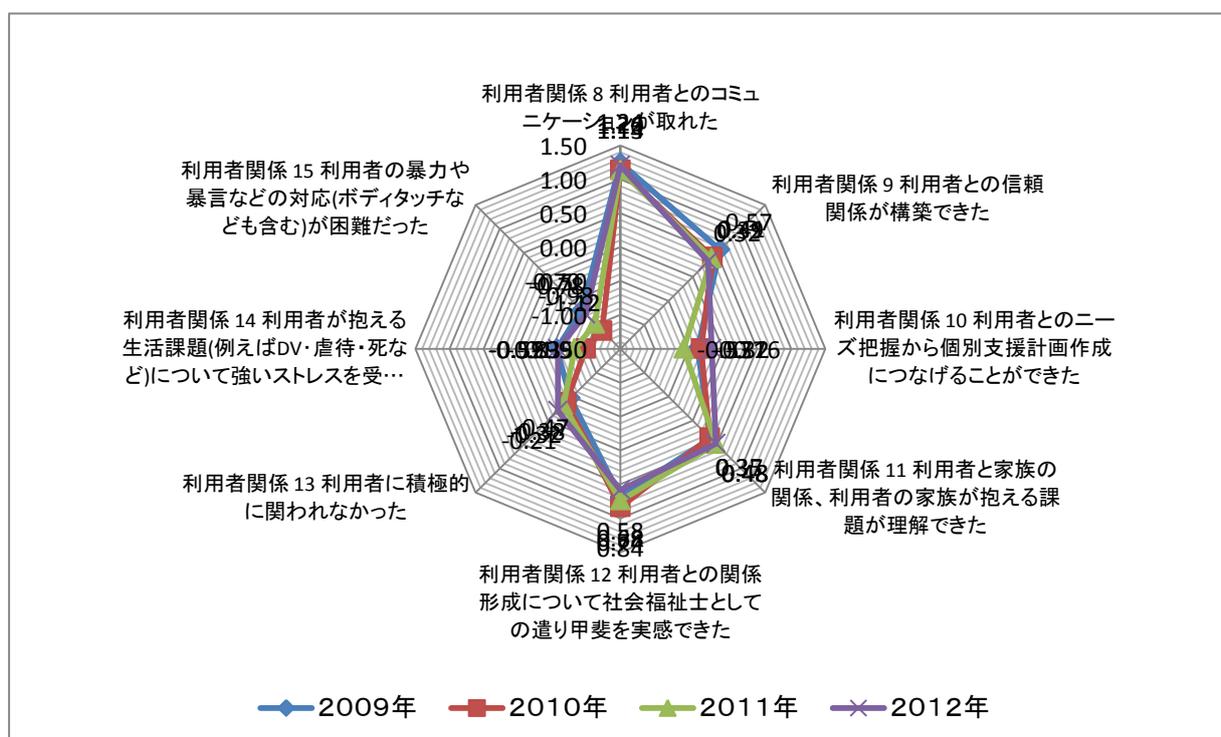


図2 利用者関係

利用者関係では、4年間のレーダーチャートの広がり少なく、全体に平均点が低い点が特徴である。差がみられるのは、「10 ニーズ把握から個別支援の作成につなげることができた」が、

やや上回ってきている程度であり、「9 利用者との信頼関が構築できた」、「12 利用者との関係形成について社会福祉士としての遣り甲斐を実感できた」という項目の回答が低下し、「13 利用者との積極的な関われなかった」、「14 利用者が抱える生活課題について強いストレスを受けた」、「15 利用者の暴力や暴言などの対応が困難だった」が、やや平均点が上回ってきている点である。つまり、実習指導者講習会が定着し実習指導の質の向上が徐々に図られてきてはいるが、個々の利用者との関係形成やニーズ把握の実践、個別支援計画の作成、家族の理解についてなどの相談援助業務についての把握は充分でなく、社会福祉士として遣り甲斐を見出している学生は少ない実態があることが推測できる。また、利用者のDV・虐待・死などの生活課題について強いストレスを受けたり、利用者の暴力や暴言の対応が困難だったりする学生がやや増えてきており、利用者との関係形成において深いコミュニケーションや信頼関係の構築が徐々に難しくなっていることが示唆された。

### 3. 実習先指導職員関係

表3 実習先指導職員関係

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		2009年	2010年	2011年	2012年
指導職員関係	16 相談援助業務の実際や社会福祉士の役割についてよく理解できた	0.71	0.81	0.87	0.42
	17 実習内容がケアワーク中心だった	-0.16	-0.13	-0.04	-0.04
	18 実習先の指導職員との関係形成は良好だった	1.18	1.13	1.26	1.14
	19 実習中、実習先の指導職員によく報告・連絡・相談ができた	0.86	0.85	1.03	0.89
	20 実習先の指導職員は定期的に振り返りをしてくれた	0.92	1.09	0.86	1.07
	21 実習先の指導職員は実習ノートによくコメントをしてくれた	1.27	1.32	1.27	1.17
	22 実習先の職場の職員の雰囲気は良かった	1.39	1.38	1.41	1.48
	23 実習先の実習生の受入体制(机・椅子・休憩場所などの物理的環境)が良かった	1.01	1.02	0.99	0.94
	24 実習先の多職種連携などのチームアプローチについて学ぶことができた	0.80	0.91	0.92	0.83
	25 実習先の経営・サービスの管理運営の実際について学ぶことができた	0.44	0.20	0.50	0.51
	26 実習先の地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、社会資源の活用・調整・開発などの重要性が理解できた	0.82	0.70	0.88	0.66
	27 実習先における地域における連携やネットワーキングの意義について理解できた	0.77	0.81	0.90	0.76
	28 実習先で自分の居場所(心理的な意味で)がなかった	-0.61	-0.84	-0.78	-0.68
	29 指導職員は多忙でなかなか指導してくれなかった	-0.53	-0.66	-0.71	-0.64
	30 実習先の職員に一方的に否定されてやる気を失った	-1.33	-1.46	-1.44	-1.25
	31 実習先の職員の態度や利用者の対応について問題があると感じた	-0.59	-0.91	-1.06	-0.73

実習生の回答は、4年間ともほぼ同じラインを描いているが、やや2011年度が外側に位置してきている。2011年度より上昇したのは、「20 指導職員は定期的に振り返りをしてくれた(+0.21)」、「22 職場の雰囲気は良かった(+0.7)」、「21 実習先の経営・サービス管理の実際について学ぶことができた(+0.1)」などである。

2012年度、2011年度より目立って低下したのは、「16 相談業務の実際や社会福祉士の役割(-0.45)」である。次に低下しているのは、「26 地域社会への働きかけとしてアウトリーチ・社会資源の活用・調整・開発(-0.22)」、「19 指導職員によく報告・連絡・相談ができた(-0.14)」、「27 地域における連携やネットワーキングの意義(-0.14)」、「18 指導職員との関係形成(-0.12)」、「24 多職種連携などのチームアプローチ(-0.09)」などである。一方実習生の主観的受け取りもあるかもしれないが、「29 実習先の職員の態度や利用者の対応について問題があると感じた(+0.33)」、「30 一方的に否定されてやる気を失った(+0.19)」、「28 自分の居場所がなかった(+

0.1)」などが、やや上昇している点がやや気になる点である。

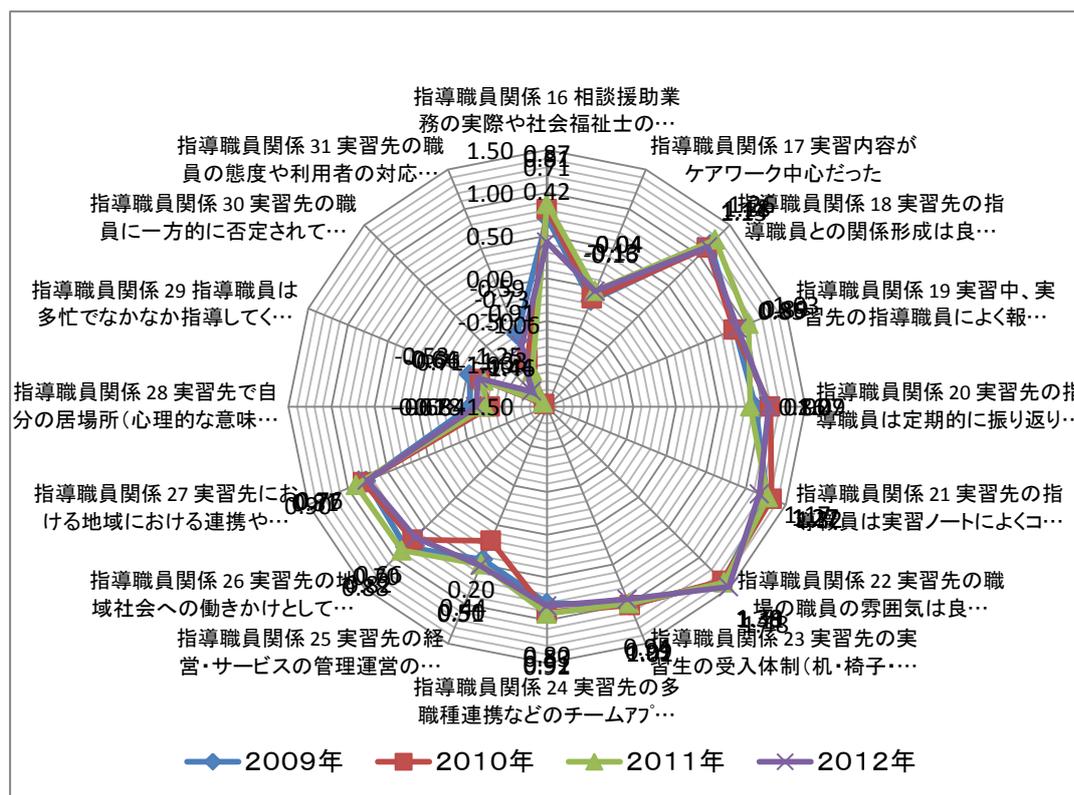


図3 実習先指導職員関係

#### 4. 自己の到達度

2009年度～2012年度の4年間の実習後の自己の到達度についての14項目のデータ比較は、以下の表の通りである。

表4 自己の到達度

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		2009年	2010年	2011年	2012年
32	実習中健康管理がしっかりできた	1.09	1.24	1.19	1.20
33	実習中は精神的に安定してた	0.47	0.52	0.61	0.51
34	実習中はストレスを感じて心身の不調が続いた	-0.68	-0.94	-0.82	-0.72
35	実習ノートの記録は考察を深めて記録できた	0.45	0.37	0.66	0.45
36	実習ノートを書くのがとても負担だった	1.15	0.70	0.83	0.81
37	実習後、事後学習で他学生と多角的に振り返り学習での学びを共有できた	0.95	0.93	1.12	0.89
38	実習を通じて友達や仲間の大切さを実感することができた	1.20	1.31	1.33	1.26
39	実習を通じ社会福祉士の価値や倫理を学ぶことができた	1.04	0.97	1.14	0.89
40	自分自身の実践・学習・研究の目的が明確になった	0.88	0.81	1.03	0.83
41	実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた	1.10	1.11	1.13	0.85
42	福祉現場の給料など待遇・労働環境の悪さを感じて嫌になった	-0.34	-0.60	-0.70	-0.61
43	実習後、理想の社会福祉士をイメージできた	0.41	0.41	0.56	0.32
44	実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた	0.76	0.83	0.86	0.46
45	実習を通じ、専門性や人間性を高めることができた	1.08	1.00	1.11	1.10

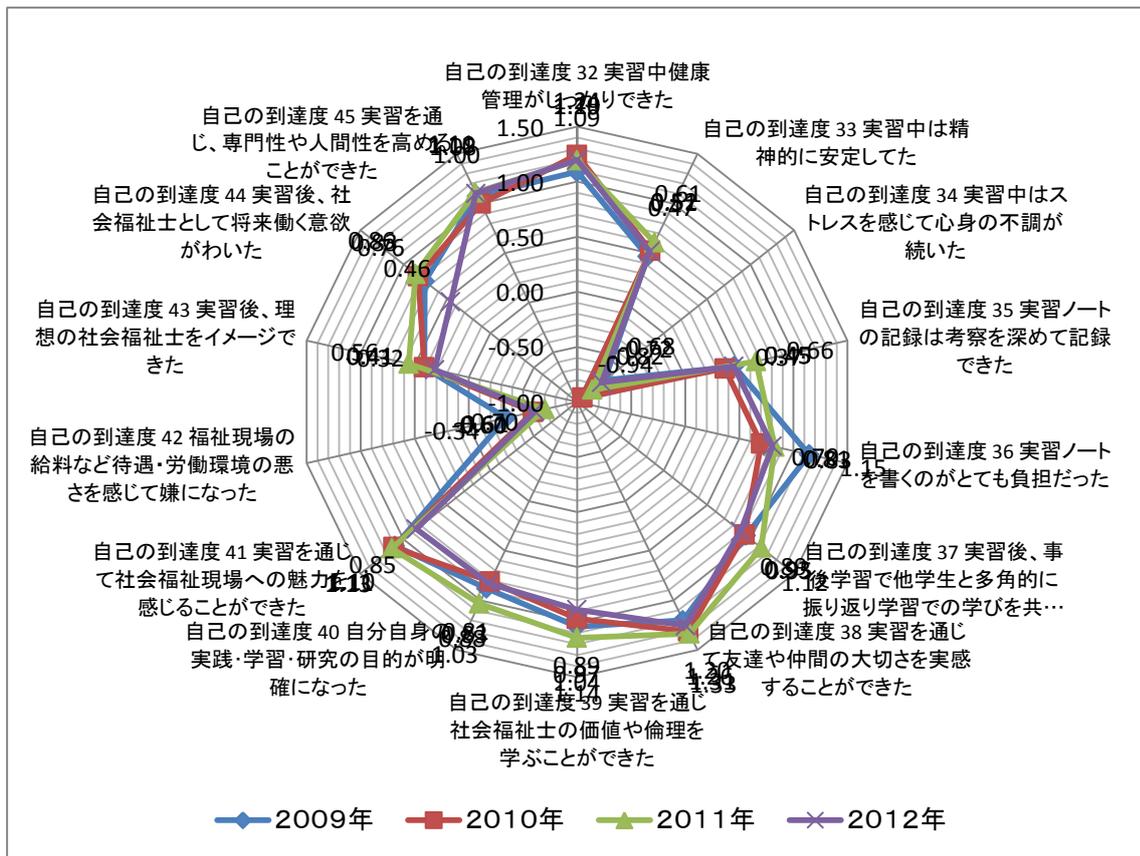


図4 自己の到達度

◆2012年度自己の到達度上位5位

2012年度、本学の実習生の自己の到達度の上位5位は、以下の項目である。

- 上位1位：38 実習を通じて友達や仲間の大切さを実感できた (1.26)
- 上位2位：32 実習中健康管理がしっかりできた (1.2)
- 上位3位：45 実習を通じ、専門性や人間性を高めることができた (1.1)
- 上位4位：37 実習後、事後学習で他学生と多角的に振り返り学習での学びを共有できた (0.89)
- 39 社会福祉士の価値や倫理を学ぶことができた (0.89)
- 上位5位：41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた (0.85)

全体的には、2009年度から徐々に毎年上昇して外側に広がってきたラインが2012年度は、内側に低下してきている。特に低下したのは以下の7項目である。

◆2012年度平均点が低下した項目

1. 44 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた (-0.4)
2. 41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた (-0.28)
3. 39 社会福祉士の価値や倫理を学ぶことができた (-0.25)
4. 43 実習後、理想の社会福祉士をイメージできた (-0.24)
5. 37 実習後、事後学習で他学生と多角的に振り返り学習での学びを共有できた (-0.23)

実習後アンケート結果から、自己の到達度上位5位は2011年度と比較してほとんど変わらないが、2012年度、特に「44 社会福祉士として将来働く意欲がわいた」という項目が低下しており、同時に「41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じることができた」、「39 社会福祉の価値や倫理を学ぶことができた」、「43 実習後、理想の社会福祉士のイメージできた」、「37 実習後、事後学習で他学生と多角的に振り返り学習での学びを共有できた」、「28 実習ノートの記録は考察を深めて記録できた」、「33 自分自身の実践・学習・研究の目的が明確になった」など項目がやや低下してきている。

## (2) 3大学のデータ比較

### 【調査期日及び対象】

- ・2012年度12月：A大学（本校）実習生 有効回答189名
- 1月：B大学実習生 有効回答49名
- 1月：C大学実習生 有効回答20名

### 【3校の特徴と実習指導体制等】

#### ◆A大学

社会福祉の単科大学。学生数多く、実習生全員が社会福祉士資格取得を目指している。実習先は、卒業生の指導者が多く、実習指導に熱心であり、大変協力的である。

#### ◆B大学

地域福祉を基盤として意欲的な実習指導を展開。地方でもあり、実習施設が遠隔地に散在し、連携がなかなか難しい。

#### ◆C大学

少人数制教育をめざし、アットホームな雰囲気。実習先職員との連携が良く、実習先の指導内容も充実している。

表5 3大学の指導体制

大学名	教員体制	学生数 (定員)	実習期間	形態	配属実習先	実習時期
A大	専任7名 非常勤8名	230名	180時間	集中・分散	1カ所+2カ所	8~10月
B大	専任16名	60名	180時間以上 (概ね24日間)	集中	1カ所	8~9月 夏休み
C大	専任10名	60名	180時間	集中	1カ所+2カ所	8~9月 夏休み

### 1. 教員関係

教員関係では、B大学が最も内側で、次にA大学、一番外側にC大学が位置している。C大学は、少人数制で細やかな個別指導が充実しており、「1 実習前の教員の事前学習の指導は充分だった」、「4 実習先の指導教員と実習内容などの調整をしてくれた」、「5 実習記録の書き方についてよく指導してくれた」などの項目について、大きく本学を上回っている点が特徴である。ただ、

C大学、B大学共に、「7実習での不安や悩みについてなかなか相談できなかった」という項目が本校よりやや数値が高いことが示された。

表6 3大学教員関係

実習体験課題		A大学	B大学	C大学
教員関係	1 実習前の教員の事前学習の指導は充分だった	1.0	0.0	1.5
	2 巡回時の指導教員はよく実習生の話を聴いてくれた	1.6	1.2	1.7
	3 巡回時の指導教員のスーパービジョンは適切だった	1.4	0.7	1.3
	4 実習先の指導教員と実習内容などの調整をしてくれた	1.0	0.5	1.4
	5 実習記録の書き方	0	0	5
	6 実習後の振り返りや実習報告書の作成について、丁寧に指導してくれた	0	0	0
	7 実習での不安や悩みについて、なかなか相談できなかった	0	0	0

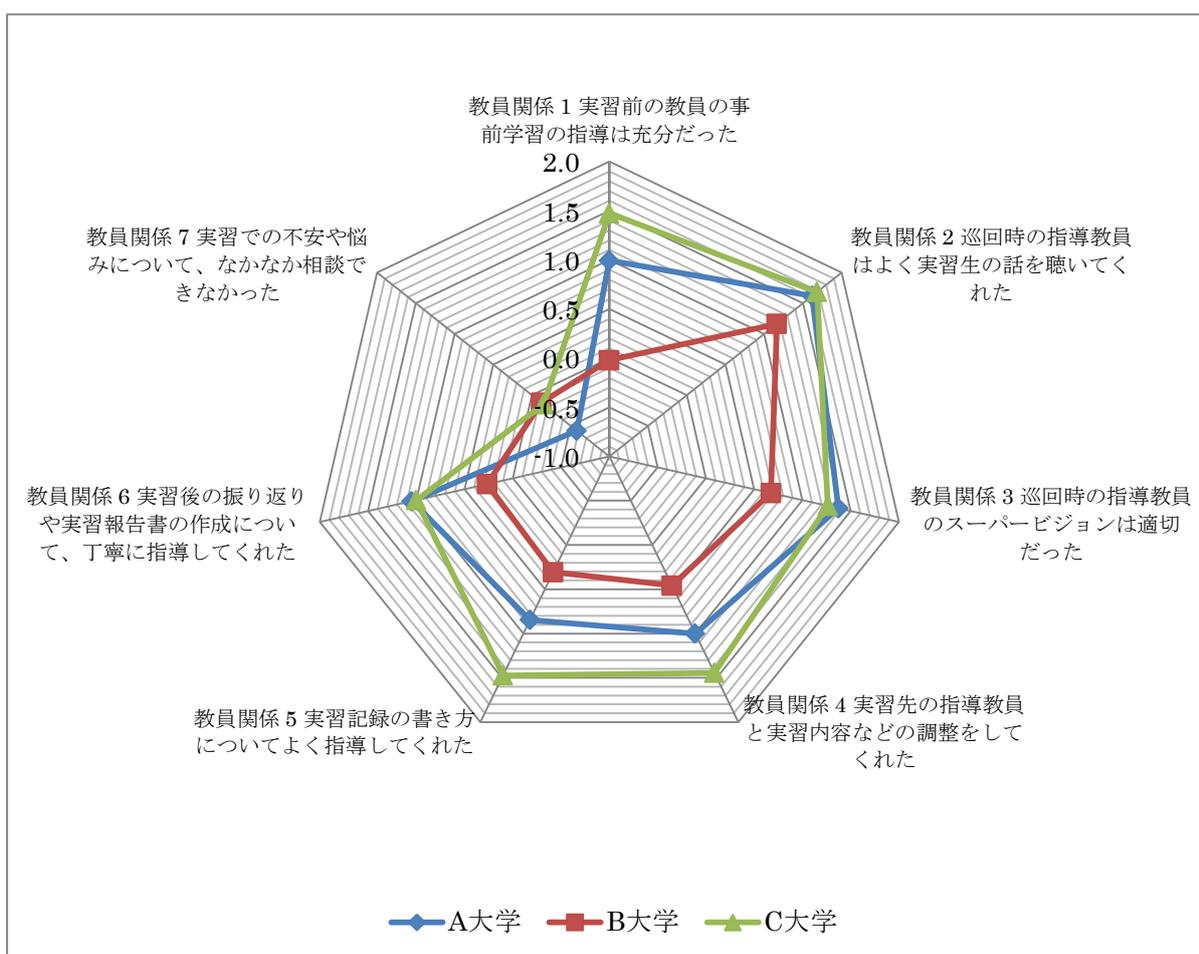


図5 3大学教員関係

## 2. 利用者関係

利用者との関係では、B大学が外側に広がっているが、「5利用者との関係について社会福祉士としての遣り甲斐を実感できた」の数値は、C大学が最も高い平均点 (0.9) を示している。B大学は、「1利用者とのコミュニケーションが取れた (1.4)」、「2利用者との信頼関係が構築できた (0.7)」、「3利用者とのニーズ把握から個別支援の計画の作成につなげることができた (-0.1)」、

「4 利用者との家族の関係、利用者の家族が抱える課題が理解できた (0.6)」などの項目が上位の数値を示した。A大学は、全体的にやや内側に位置しているが、「5 利用者との関係について社会福祉士としての遣り甲斐を実感できた」(0.6) はややB大学より上回っており、「2 利用者との信頼関係の構築ができた」、「3 利用者とのニーズ把握から個別支援の計画の作成につなげることができた」、「4 利用者との家族の関係、利用者の家族が抱える課題が理解できた」の数値が上昇すれば、社会福祉士としての遣り甲斐につながっていくかもしれない。

表7 3大学利用者関係

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		A大学	B大学	C大学
利用者関係	1 利用者とのコミュニケーションが取れた	1.2	1.4	1.0
	2 利用者との信頼関係が構築できた	0.3	0.7	0.4
	3 利用者とのニーズ把握から個別支援計画作成につなげることができた	-0.2	-0.1	-0.2
	4 利用者との家族の関係、利用者の家族が抱える課題が理解できた	0.5	0.6	-0.2
	5 利用者との関係形成について社会福祉士としての遣り甲斐を実感できた	0.6	0.5	0.9
	6 利用者に積極的に関われなかった	-0.2	-0.4	-0.1
	7 利用者が抱える生活課題(例えばDV・虐待・死など)について強いストレスを受けた。	-0.6	-0.6	-0.7
	8 利用者の暴力や暴言などの対応(ボディタッチなども含む)が困難だった	-0.8	-0.6	-0.6

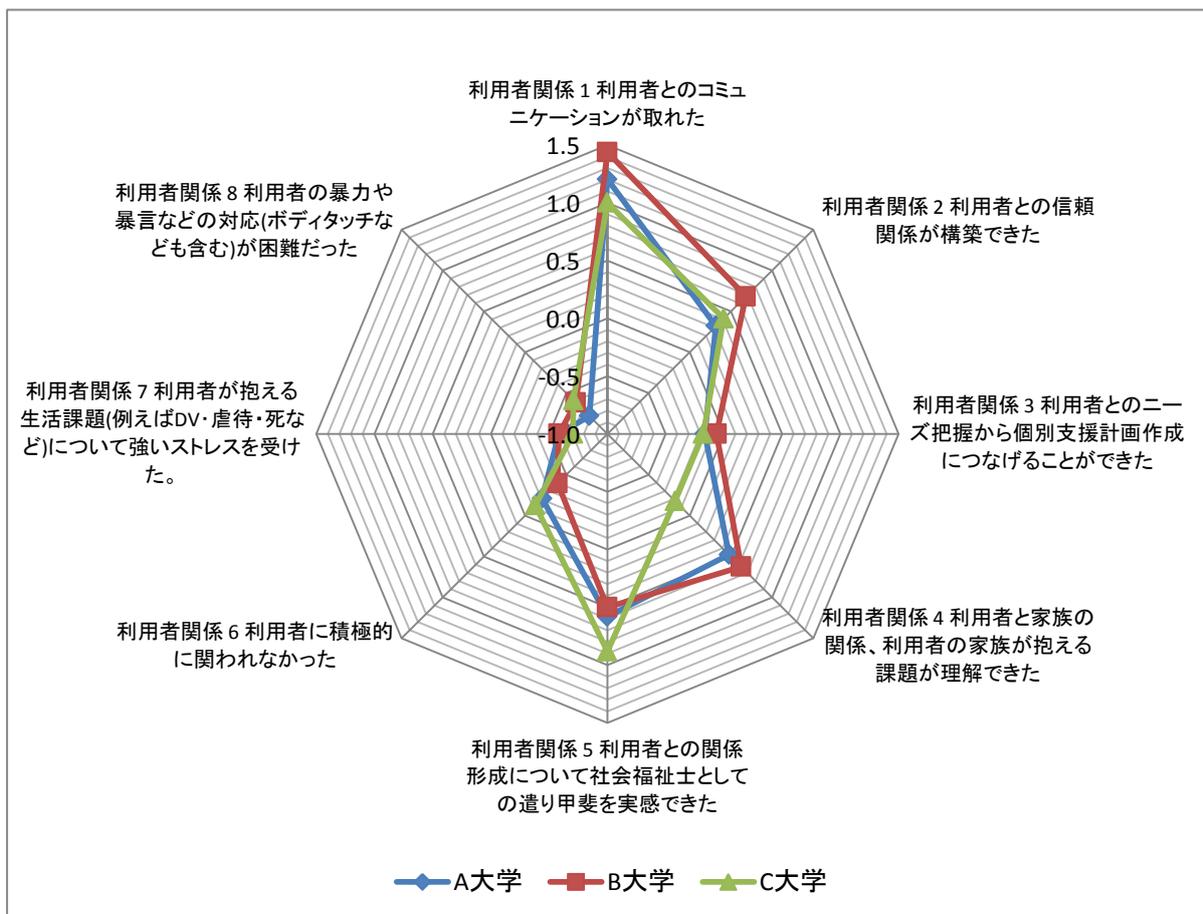


図6 3大学利用者関係

### 3. 指導職員関係

実習先の指導職員関係では3大学とも接近しているが、C大学がやや外側に広がり、ほとんどの項目で高い数値を示している。A・B大学では、共に「10 ケアワーク中心だった」という数値が高いが、C大学では数値が低く、指導内容が多職種連携などのチームアプローチ、アウトリーチ、社会資源の活用・調整・開発、連携やネットワーキングの意義、相談業務や社会福祉士の役割の理解などの指導内容が充実しており、定期的な振り返りと実習ノートのコメントも充実していることが学生の高い満足度につながっていることが推測された。C大学は勿論であるが、この3年間の中でB大学の数値が大きく伸びていることが印象的だった。

表8 3大学実習先指導職員関係

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		A大学	B大学	C大学
9	相談援助業務の実際や社会福祉士の役割についてよく理解できた	0.4	0.5	1.1
10	実習内容がケアワーク中心だった	0.0	-0.2	-0.7
11	実習先の指導職員との関係形成は良好だった			
12	実習中、実習先の指導職員によく報告・連絡・相談ができた	1.1	0.9	1.1
13	実習先の指導職員は定期的に振り返りをしてくれた	0.9	0.6	0.9
14	実習先の指導職員は実習ノートによくコメントをしてくれた	1.1	1.0	1.4
15	実習先の職場の職員の雰囲気は良かった	1.2	1.5	1.4
16	実習先の実習生の受入体制(机・椅子・休憩場所などの物理的環境)が良かった	1.5	1.4	1.3
17	実習先の多職種連携などのチームアプローチについて学ぶことができた	0.9	1.1	1.4
18	実習先の経営・サービスの管理運営の実際について学ぶことができた	0.8	1.1	1.5
19	実習先の地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、社会資源の活用・調整・開発などの重要性が理解できた	0.5	0.4	0.9
20	実習先における地域における連携やネットワーキングの意義について理解できた	0.7	1.0	1.2
21	実習先で自分の居場所(心理的な意味で)がなかった	0.8	1.0	1.2
22	指導職員は多忙でなかなか指導してくれなかった	-0.7	-0.7	-0.9
23	指導職員は一方的に否定されてやる気を失った	-0.6	-0.5	-1.0
24	実習先の職員に一方的に否定されてやる気を失った	-1.2	-1.3	-1.1
24	実習先の職員の態度や利用者の対応について問題があったと感じた	-0.7	-0.6	-0.6

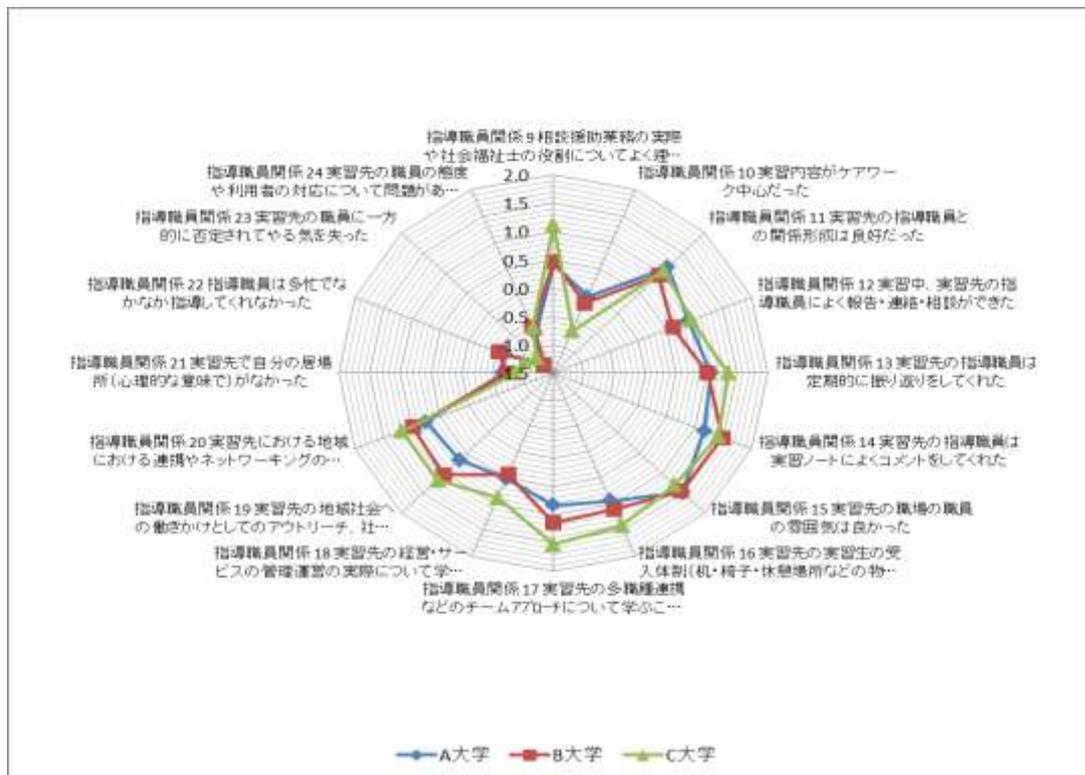


図7 3大学実習先指導職員関係

#### 4. 自己の到達度

自己の到達度については、やや内側をB大学、次にA大学、最も外側にC大学が位置している。C大学の上位5位は以下の通りである。

表9 3大学自己の到達度

実習を通じて感じたこと(学びと課題)		A大学	B大学	C大学
自己の到達度	25 実習中健康管理がしっかりできた	1.2	1.0	1.3
	26 実習中は精神的に安定してた	0.5	-0.1	0.6
	27 実習中はストレスを感じて心身の不調が続いた	-0.7	-0.6	-1.2
	28 実習ノートの記録は考察を深めて記録できた	0.4	0.2	0.6
	29 実習ノートを書くのがとても負担だった	0.8	0.7	0.4
	30 実習後、事後学習で他学生と多角的に振り返り学習での学びを共有できた	0.9	0.6	0.5
	31 実習を通じて友達や仲間の大切さを実感することができた	1.3	1.5	1.2
	32 実習を通じ社会福祉士の価値や論理を学ぶことができた	0.9	0.8	1.3
	33 自分自身の実践・学習・研究の目的が明確になった	0.8	0.1	1.1
	34 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた	0.9	0.4	1.1
	35 福祉現場の給料など待遇・労働環境の悪さを感じて嫌になった	-0.6	-0.5	-1.2
	36 実習後、理想の社会福祉士をイメージできた	0.3	-0.2	0.8
	37 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた	0.5	0.1	0.5
	38 実習を通じ、専門性や人間性を高めることができた	1.1	0.7	0.4

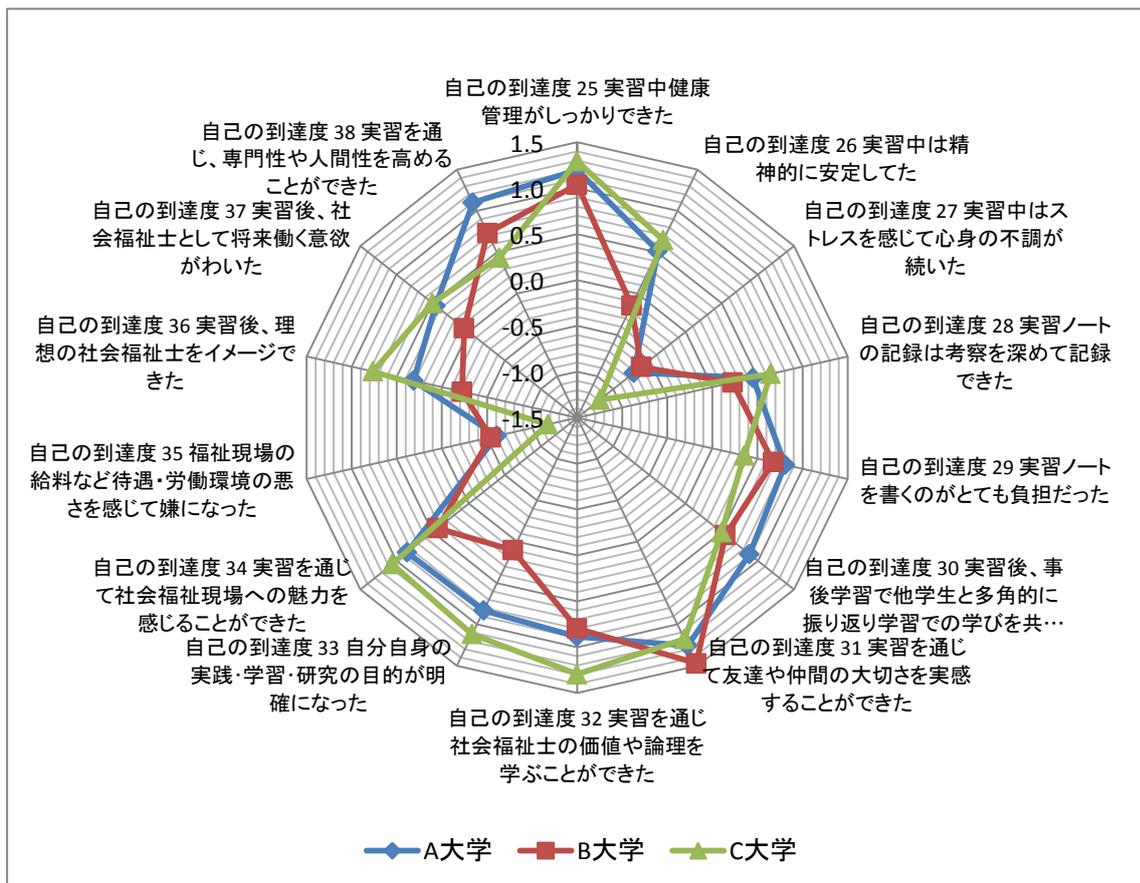


図8 3大学自己の到達度

#### ◆ C大学上位5位

上位1位：25 実習中健康管理がしっかりできた (1.3)

32 社会福祉士の価値や倫理を学ぶことができた (1.3)

上位 2 位 : 31 実習を通じて友達や仲間の大切さを実感できた (1.2)

上位 3 位 : 34 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた (1.1)

33 自分自身の実践・学習・研究の目的が明確になった (1.1)

上位 4 位 : 36 実習後、理想の社会福祉士のイメージができた (0.8)

上位 5 位 : 26 実習中は精神的に安定してた (0.6)

28 実習ノートの記録は考察を深めて記録できた (0.6)

C大学は、「28 実習ノートの記録は考察を深めて記録できた」、「32 社会福祉士の価値や倫理を学ぶことができた」、「33 自分自身の実践・学習・研究の目的が明確になった」、「34 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた」、「36 実習後、理想の社会福祉士のイメージができた」の 5 項目が他大学をより高い数値であるが、「38 実習を通じ専門性や人間性を高めることができた」は、最も数値が低かった。C大学の年齢層がやや高めで社会経験のある学生が多い為かもしれない。C大学の学生は「27 実習中はストレスを感じて心身の不調が続いた」、「35 福祉現場の給料など待遇・労働環境の悪さを感じて嫌になった」の数値が他の二大学より数値が低かった。

◆実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた

「37 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた」という質問項目に、「4 とても思う 44 名 (20%)」、「3 少し思う 93 名 (41%)」、「2 あまり思わない 70 名 (31%)」、「1 まったく思わない 14 名 (6%)」、「未回答 5 名」だった。各大学毎に、「4 とても思う」・「3 少し思う」の肯定的評価と「2 あまり思わない」・「1 まったく思わない」に分けてみると、A大学の否定的回答（「2 あまり思わない」と「1 まったく思わない」を合算）をした実習生は、約 35%、B大学は約 45%、C大学は約 35%だった。

表 10 自己の到達度 : 37 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた

	4.とても思う	3.少し思う	2.あまり思わない	1.まったく思わない	未回答
A大学	34	62	44	9	2
B大学	4	22	17	5	1
C大学	6	9	9	0	2
計	44名	93名	70名	14名	5名

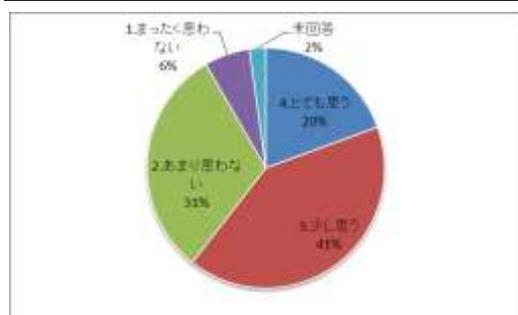


図 9 自己の到達度 : 37 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた

◆実習後、理想の社会福祉士をイメージできた

「43 実習後、理想の社会福祉士がイメージできた」の質問項目の回答は、「4 とても思う 39 名

(18%)」、「3 少し思う 84 名 (38%)」、「2 あまり思わない 71 名 (32%)」、「1 まったく思わない 21 名 (10%)」、「未回答 4 名」だった。各大学毎に、「4 とても思う」・「3 少し思う」の肯定的回答と「2 あまり思わない」・「1 まったく思わない」の否定的回答に分けてみると、A大学の否定的回答（「2 あまり思わない」と「1 まったく思わない」を合算）をした実習生は、約 39%、B大学は約 57%、C大学は約 24%だった。「43 実習後、理想の社会福祉士がイメージできた」という項目は、「37 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた」という項目よりやや否定的評価が増えており、「将来働く意欲がわかかなかった」理由として、理想の社会福祉士像をイメージできなかった可能性が高いことが推測できる。

表 11 自己の到達度：43 実習後、理想の社会福祉士がイメージできた

	4.とても思う	3.少し思う	2.あまり思わない	1.まったく思わない	未回答
A 大学	30	59	48	12	2
B 大学	4	17	20	8	0
C 大学	5	8	3	1	2
計	39	84	71	21	4

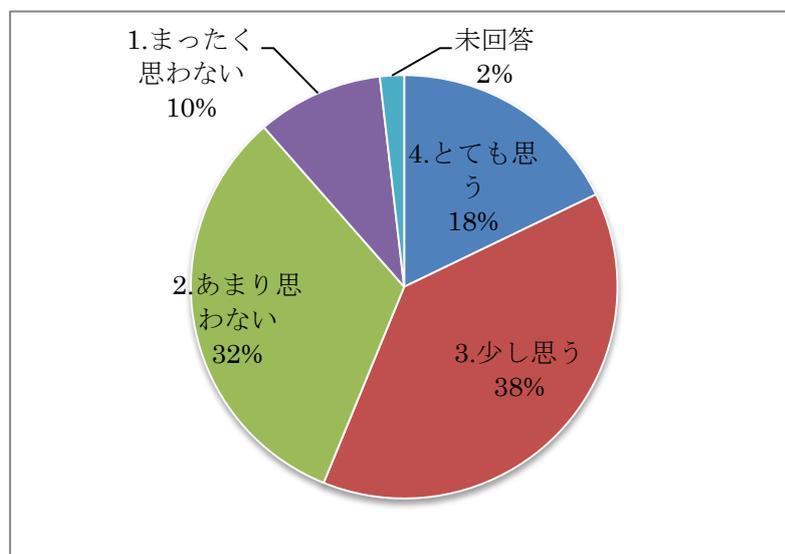


図 10 自己の到達度：実習後、理想の社会福祉士のイメージができた

#### ◆実習後、社会福祉現場への魅力を感じることができた

「41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じることができた」の質問項目の回答は、「4 とても思う 68 名 (31%)」、「3 少し思う 93 名 (42%)」、「2 あまり思わない 45 名 (21%)」、「1 まったく思わない 9 名 (4%)」、「未回答 4 名」だった。各大学毎に、「4 とても思う」・「3 少し思う」の

肯定的回答と「2 あまり思わない」・「1 まったく思わない」に分けてみると、A大学の否定的評価（「2 あまり思わない」と「1 まったく思わない」を合算）をした実習生は25%、B大学は33%、C大学は11%だった。

「41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた」は、「43 実習後、理想の社会福祉士がイメージできた」や「37 実習後、社会福祉士として将来働く意欲がわいた」という項目より否定的評価が少なく、「41 実習後学生は社会福祉現場への魅力を実感できている」と肯定的評価（「4 とても思う」と「3 少し思う」の合算）をした学生は、3大学で73%だった。

表 12 自己の到達度：41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた

	4.とても思う	3.少し思う	2.あまり思わない	1.まったく思わない	未回答
A 大学	54	59	32	4	2
B 大学	7	26	13	3	0
C 大学	7	8	0	2	2
全体	68	93	45	9	4

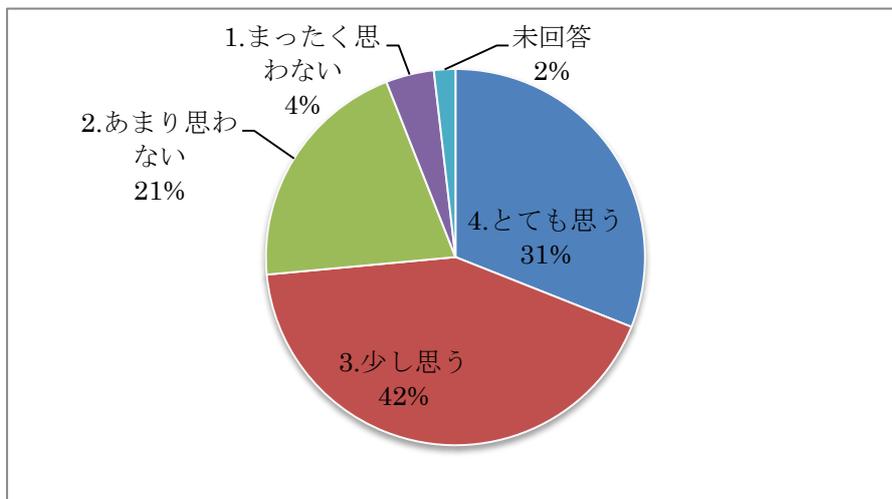


図 11 自己の到達度：41 実習を通じて社会福祉現場への魅力を感じる事ができた

### (3) 実習生アンケート調査の単純集計結果の考察

4年間の実習後アンケート調査結果のデータ比較から、本学の学生の実習の学びの中核は、「実習を通じて友達や仲間の大切さを実感していること」、「専門性や人間性を高める事ができた」、「実習後、事後学習で他学生と多角的に振り返り学習での学びを共有できた」、「社会福祉士の価値や倫理を学ぶ事ができた」、「実習を通じて社会福祉現場への魅力を実感できた」の上位5項目が抽出され、「福祉現場の給料など待遇・労働環境の悪さを感じて嫌になった」という学生が少ないことが明らか

になった。そして、厳しい実態の中でソーシャルワークの意義を学び、実践現場を創造・発展させていくことの魅力や変革していく可能性を見出していることが明らかになった。しかし、一方「実習後社会福祉士として働く意欲があまりわからない、まったくわからない」と否定的回答をしている学生が2012年度は約35%に至っていることが把握された。

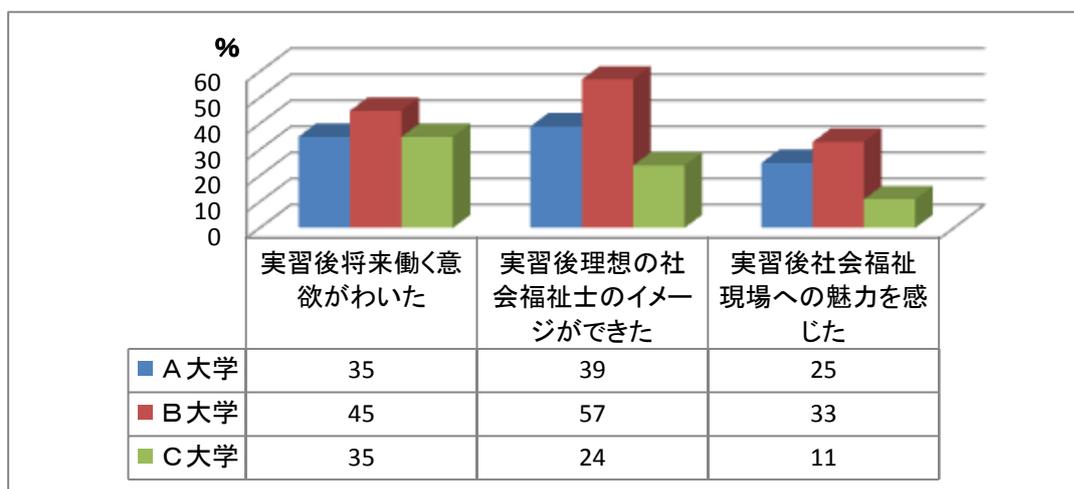


図12 3大学の否定的回答（「2あまり思わない」「1まったく思わない」）の割合

3大学実習後アンケートのデータ比較からも、「実習後、社会福祉士として働く意欲があまりわからない、まったくわからない」と否定的な回答をした学生の割合は、37%で図9の通りである。同時に、「実習後理想の社会福祉士をイメージがあまりできない、まったくできない」と否定的回答した学生も、3大学で約42%いることも明確になり、深刻な実態であることが浮き彫りになった。ただ、「実習後社会福祉現場への魅力を感じる事があまりできなかつた、まったくできなかつた」割合は約25%であり、相談援助実習のプログラム内容によって大きく変化する可能性があることが示唆された。

#### ◆2010年度及び2011年度評価表比較

実習先が2010年度及び2011年度経験させていない・していない評価項目の件数一覧は図13の通りである。評価表の大項目毎に区分すると以下の項目の件数が特に高いことが示唆される。

- ①利用者理解とニーズ把握、支援計画の作成
- ②利用者・その関係者との援助関係形成、
- ③社会福祉士としての職業倫理
- ④管理運営
- ⑤地域社会への働きかけ

実習先が「2010年度及び2011年度経験させていない・していない」評価項目は、具体的には社会福祉士の価値、倫理判断行為の発見・抽出、社会福祉士の業務内容、利用者の実態・統計的理解、個別支援計画の作成、利用者・家族の関係、対象の権利擁護・エンパワメントの実践、実

習施設機関の関係法令の内容、意思決定過程、地域の福祉課題、地域のインフォーマル資源の種類や役割、地域への働きかけや組織化の方法などの項目の件数が高いことが示されている。

このことから、2009年度から新カリキュラムが実施され、実習指導者講習会が開催され、実習指導の内容が変わりつつあるが、一方でまだまだ従来の体験型実習指導の内容になっている実態もあること、また、実習指導体制が十分でなく上手く実習指導ができずに悩みつつ実習指導職員が実習生の受け入れに悪戦苦闘している実態が明らかになってきた。

### 〈まとめ〉

3大学の実習後アンケート結果のデータ比較を見て本校の実習指導内容の振り返りをすると、教員関係では、実習前の事前学習と実習記録の書き方を丁寧に指導する必要があると感じた。また、巡回指導において、実習内容の調整をすることが重要であることが示唆された。

利用者関係では、学生のコミュニケーション力の低下もベースにあるのかもしれないが、利用者との信頼関係の構築が難しかったこと、利用者のニーズ把握や個別支援計画の作成に困難があること、利用者との関係形成について社会福祉士としての遣り甲斐が見いだせずにいる実態が明らかになり、実習前の事前学習として、事例によるロールプレイングなどの実践的な内容に加えケアマネジメント等の学習の強化が課題であることが示された。

実習先の指導職員関係からは、ケアワーク中心の実習内容からソーシャルワーク実習への実習内容の移行が必要であることが示唆された。具体的には、社会福祉士の役割・相談業務内容・地域社会への働きかけとしてアウトリーチ、多職種連携などのチームアプローチ、実習先の経営・サービス管理運営、社会資源の活用・調整・開発、地域における連携やネットワーキングの意義などの項目が向上すると、C大学のように大きく学生の自己の到達度が上昇することが示唆された。また、B大学においても、2011年度から2012年度指導職員関係が大きく外側に開き、学生の自己の到達度も上昇してきている。残念なことに本学の場合は、教員関係・利用者関係・実習先指導職員関係においてあまり差異がなく、2012年度実習生の自己の到達度がやや内側に傾く傾向があることが見えてきた。本学の場合、学生数が多く、実習先ののべ件数も223～271件（2010年度223件・2011年度259件・2012年度271件）あり、学生の状況に合わせた細やかな指導が難しい面もあるが、だからこそ科学的な分析のもとに学生に必要な指導を随時適切に行っていくことが求められる。3大学はそれぞれ地域性、定員数、教員体制、養成校歴、指導内容なども違うが、毎年の実習生の授業評価としての実習生のアンケート調査の取り組みが、他大学と比べることにより、本校の強みや弱みが浮き彫りになり、改善を要する課題が明確になり、アンケート調査結果の振り返りが教員間の情報共有や実習先指導職員との連携強化など実習指導の向上につながってきた。

実習先アンケート調査結果については、今後自由記述の質的分析を行い、一人一人の実習生が実習後働く意欲が湧き、理想の社会福祉士像がイメージできるような実習プログラムの構築に向けて努力していきたい。

## 経験させていない・していない項目比較

■ E 2010経験させていない ■ E 2011経験させていない

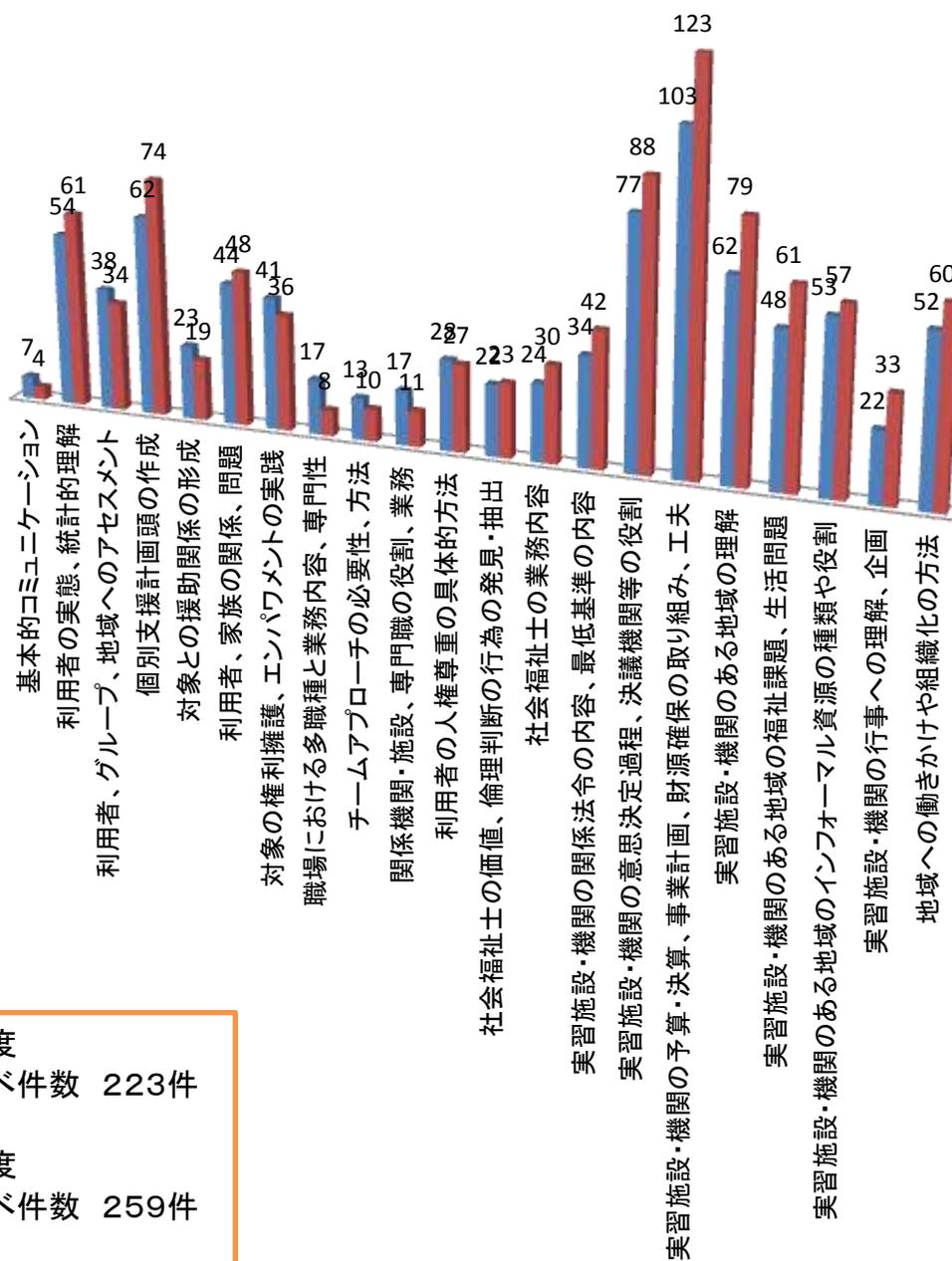


図13 2010年度及び2011年度「経験させていない・していない」評価項目状況

#### IV. 実習先指導職員グループヒアリング調査結果

##### ◆1回目

日時：2012年9月7日（金）18:45～21:00

場所：日本社会事業大学社会事業研究所会議室

参加者：実習指導職員6名、本学教員5名、記録係1名 計12名

表13 参加者状況

NO	種別	役職及び職種	人数
1	地域包括支援センター	相談員	1
2	救護施設	相談員	1
3	障害者支援施設	社会福祉士	1
4	更生保護施設	補導員	1
5	社会福祉事務所	社会福祉士	1
6	児童養護施設	主任指導員	1
7	大学	教員	6
計			12

##### ◆2回目

2013年3月1日（金）18:00～20:30

場所：日本社会事業大学介護実習棟被服室

参加者：実習指導職員6名、本学教員13名（非常勤含む）、記録係1名 計20名

表14 参加者状況

No	施設名	役職及び職種	人数
1	特別養護老人ホーム	主任生活相談員・介護支援専門員	1
2	救護施設	地域担当係長・相談員	1
3	地域包括支援センター	主任相談員	1
4	更生保護施設	補導主任・福祉職員	1
5	障害者支援施設	生活支援員	1
6	福祉事務所	係長	1
7	大学	教員	13
計			19

学生が自ら考え行動できる効果的な実習指導のプログラムについて、2012年度は2

回実習施設の指導職員のヒアリング調査を行った。その結果実習プログラムとして、①地域資源調査や福祉マップ作り、②面接や家庭訪問の体験、③利用者との関係形成やニーズ把握のアセスメント、④個別支援計画の作成、⑤個別支援計画の説明やケースカンファレンス（または地域ケア会議等）のロールプレイング、⑥介護予防教室などのイベント企画、⑦実習ノートの考察の深め方、⑧実習での学びの発表など多様な内容が把握された。しかし、実習指導は学生の個々の状況に応じて違い、学生の個別のニーズを上手に引き出したり、実践への振り返りが重要であるなど、プログラムだけでなく、スーパービジョンとマネジメントが密接に関わっていることも明らかになった。特に、理想の社会福祉士像の伝え方やスーパービジョンのあり方については、丁寧に日々の振り返りをして、実践の言語化や理論化を共にする姿勢が学生の学習意欲を刺激し、ソーシャルワーク実践の魅力を引き出していることが、2回の実習指導職員のグループヒアリング調査結果から分析できた。そこから、大学における事前指導と事後指導の向上や帰校日指導・巡回指導との連動が重要であることが見えてきた。

## **V. 次年度に向けて**

次年度は、実習生アンケートの自由記述の分析及び評価表・実習報告書・実習ノートの分析、実習生のインタビュー調査を行い、学生がどのような実習プログラムを求めているのか学生の実態を明らかにする。また、実習先アンケート調査を実施し、効果的な実習プログラムの収集をすると共に、その結果を実習先指導職員・実習生・教員で分析し、どのような実習プログラムが良いのか新しい相談援助実習モデル構築に向けて取り組み、よりよい相談援助実習モデルの構築に向けて努めていきたい。